

平成26年6月26日

## 岡谷小学校のあり方に関する提言

### 【経過と背景】

平成25年3月の市及び市教育委員会による岡谷小学校の敷地に関する地質調査の結果の公表を受けて、本委員会は、同年5月に市教育委員会からの委嘱を受け、今後の岡谷小学校のあり方について、現地確認を含む全13回の会議により検討を重ねてまいりました。

もとより、開校以来、140年の歴史を有する岡谷小学校は、豊かな自然に囲まれて学んでいる児童はもちろん、歴代の卒業生や地元の皆さんにとって、深い愛着と誇りのある大切な学校であります。

一方、今、日本は、未曾有の被害を受けた東日本大震災を経験した国として、災害に強い国土づくりが進められています。特に学校施設の耐震化は国全体が取り組まなければならない喫緊の課題であり、岡谷市も例外ではありません。

こうした中で、岡谷小学校の校舎、敷地の変状が確認され、市教育委員会が実施した地質調査の結果、軟弱盛土であることが判明し、現状のままでは、耐震化のための校舎の建て替えができないことを、我々は受け止めなければなりません。その上で、何よりも大切なことは、児童が安全に安心して過ごすことのできる学校環境の確保ではないかと考えます。

### 【あり方検討委員会での検討】

本委員会では、このような岡谷小学校の置かれている現状について、現地も視察しながら認識を深めてまいりました。また、第6回会議からは、限られた時間の中で効率的に議論を進めるため、岡谷小学校の現地存続、移転、統合分散による3つの分科会を設け、時間をかけて検討させていただきました。

その中で、まず、現地存続分科会では、事務局から示された地盤改良と抑止杭による対策工法をA案とし、検討の中で、A案を一部だけ実施するB案、軟弱盛土を切り下げて法面の安全対策も実施するC案、敷地北側の土地を活用するD案が提案されました。

移転分科会では、移転先を同じ通学区内の公有地のまとまった更地により、中央町駐車場と駅南用地に成田公園を加えた3箇所を候補地として検討し、移転を前提にした場合の跡地の活用についても議論が深められました。

統合分散分科会では、岡谷小学校の置かれている状況や統合分散を前提にした場合の問題点などを洗い出し、児童数や通学距離などの想定を踏まえた魅力ある新たな学校づくりの視点により、統合分散を進めるために必要となる支援や工程などを検討してまいりました。

#### 【提言の骨子】

この中で、現地存続や移転の検証にあたっては、児童が日々学び、過ごす教育環境としての適正、小学校施設整備指針への適合のほか、土木、建築分野に関わる高い専門性が必要であり、更には、地域の安全、防災対策に関する視点、地域づくりやまちづくり全体から見た視点など、総合的見地から考える必要があります。

また、これらの視点を含めて、現地存続及び移転分科会から出された対策工法や整備手法としての各案の検証に関して、いずれの案も課題があり現実的には困難という意見が多くを占めたところではありますが、現地存続を望まれる強い思いがある中で、分科会による検討案から、本委員会として最良の案をひとつに選択することはできないと判断しました。

少なくとも、耐震化が完了しないままでは、いつ起こるかもしれない災害等の危険性を存置することにはほかならず、現在の校舎を使い続けるべきではないということを、多くの委員が認識しているところです。

#### 【提言】

この考え方を前提にすれば、現地存続や移転の各案に関しては、大規模な工事の終了までに何年もかかること、事業の困難さ、莫大な事業費のほか、長期間、他校で過ごし再び移ることの負担など、とても現実的とはいえないとの意見が多くを占め、子どもの安全と学びを保障するためには、現在の岡谷小学校から最寄りの小学校へと統合分散を図っていくことが、やむを得ない選択ではないかと考えます。

その場合、最も大切にしたいことは、児童や保護者、関係者への十分な配慮であります。今までの環境が変わることに対する様々な不安や心配、準備期間の短さなどから、統合分散の難しさを指摘する意見もありました。

しかし、今回の岡谷小学校の対応は、児童の安全確保を最優先にしたものである以上、限られた時間の中でも、早期に当事者を交えた準備委員会を設けるなど、可能な限りの準備と対応を進め、円滑かつ確実に実施していく必要があります。残された時間に決して余裕はありません。

次に、岡谷小学校の敷地が学校としては残せなくなるにしても、周辺地域に危険が及ばないように、敷地に対する安全対策を講じる必要があります。

また、岡谷小学校の歴史を伝承し、自然学習できる場所として整備するなど、安全対策をした上で、市内全小学校の児童が利用できる学びの場、地域住民の誇りとなるような憩いの場として、敷地の活用を図っていただきたいと願います。

約1年をかけたこの委員会としての検討は、本提言により締めさせていただきますが、岡谷小学校のあり方に関しては、学校設置者である市及び市教育委員会として、責任ある決断をお願いいたします。

そのためにも、この会議での検討内容や資料、委員から出された貴重な意見などは、十分に活かしていただける内容であり、委員それぞれの思いをしっかりと受け止め、今後活かしていただきたいと思えます。

先人たちが築いてきた岡谷小学校の文化や歴史、伝統は、このまちの大切な財産と言えます。どのような形になろうとも、しっかりと継承していくための施策を実行していただき、次の時代を見据えた魅力ある学校づくりを進め、未来を担う子どもたちの教育の質を高めて欲しいと願います。

また、学校は地域とともにあります。これからの学校づくりには、市民や保護者の声を反映しながら進めることが大切です。今回の岡谷小学校の対応は、地域や保護者など関係者に大きな心配と不安をかけてきました。今後は、地域と一緒に取り組むことで、子ども達が郷土を愛する心を育む学校づくりをめざしていただきたい。

最後に、少子化、人口減少社会が進展する中で、将来の児童数を見据えた市内全体の学校の適正な配置を見直す時期が来ています。

今後の岡谷小学校の対応を、次の時代を見据えた、学校教育の新しいかたちづくりのモデルとなるよう、市内学校施設の適正な配置や通学区の見直しの契機にして欲しいと思えます。

以上、「岡谷小学校のあり方検討委員会」としての提言といたします。